

第50回名古屋春栄会演能会

演目の紹介

平成27年8月2日（日）

名古屋春栄会

目 次

舞囃子	海人（あま）	1
	八島（やしま）	2
仕舞	田村（たむら）	3
	柏崎（かしわざき）	4
	熊坂（くまさか）	5
	遊行柳（ゆぎょうやなぎ）	7
	鵜（ぬえ）	8
舞囃子	竹生島（ちくぶしま）	10
	猩々（しょうじょう）	11
仕舞	田村（たむら）	12
	葛城（かずらき）	13
	融（とおる）	14
	鵜ノ段（うのだん）〔鵜飼（うかい）〕	15
	猩々（しょうじょう）	16
舞囃子	高砂（たかさご）	17
	枕慈童（まくらじどう）	18
	紅葉狩（もみじがり）	19
独吟	小袖曾我（こそでそが）	20
	橋弁慶（はしべんけい）	21
仕舞	玉葛（たまかすら）	22
	天鼓（てんこ）	23
能	楊貴妃（ようきひ）	24
仕舞	初雪（はつゆき）	27
能のミニ知識		28

このリーフレットは、第50回名古屋春栄会の演目を解説したものです。
演目は、番組順に並んでいます。
詞章については、金春流の謡本から転載しました。

海人（あま）

【分類】初・五番目物（略脇能物＝女菩薩物） ＊早舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：海人（面・曲見）、後シテ：龍女（面・泥眼）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

房前大臣（藤原房前）は讃岐国（香川県）の志度の浦で亡くなったという母の追善のため、従者と供人を伴って、はるばる志度の浦までやって来ます。すると、一人の海人が現れます。従者が、海人に水底に映る月を見たいので、海松布〔みるめ〕を刈るように命ずると、海人は昔も、宝の珠を海底から取り上げるためにもぐったことがあると言い、昔、唐土から興福寺に三種の宝が贈られたが、そのうち面向不背の珠だけが、この浦の沖で龍宮に取られてしまった。藤原淡海公（藤原不比等）はそのことを深く惜しまれ、身をやつしてこの浦に下り、海人乙女と契りを交わし、その玉を取り返してくれるように頼んだこと、海人が淡海公の子をもうけ、その子が今の房前大臣であることを語ります。これを聞いた房前大臣が、それは自分のことだと名乗ると、海人は、我が子を淡海公の後継ぎにする約束と交換に、千尋の綱を腰に結わえ、海に潜り、見事に珠を取り返すものの、龍神の激しい抵抗にあい、自分の乳の下を掻き切って、そこに珠を隠し、流れ出る血潮に龍神がたじろぐうちに、息も絶え絶えになりながら海人は帰ってきたものの、息を引き取りましたと語り、自分こそ、その海人の亡霊であると明かし、海中に姿を消します。

<中入>

房前大臣は、浦の者からも珠取りの次第を聞き、亡き母の残した手紙を読み、十三回忌の追善供養を営みます。読経のうちに、亡霊は龍女の姿で現れ、法華経の功德で成仏できたと喜び、舞を力強く、美しく舞います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

あら有難の御弔やな。この御経に引かれて。五逆の達多は天王記別を蒙り。八才の龍女は南方。無垢世界に生をうく。なおなお轉読。し給うべし。深達罪福相。遍照於十方。微妙浄法身具相。三十二。以。八十種好。用莊嚴法身。天人所戴仰。龍神咸恭敬。あら有難の御経やな。

<早舞>

今この経の徳用にて。今この経の徳用にて。天龍八部。人與非人。皆遙見皮。龍女成佛。さてこそ讃州志渡寺と号し。毎年八講。朝暮の勤行。佛法繁昌の靈地となるも。この孝養と。うけたまわる。

八 島 (やしま)

【分類】二番目物（修羅能） *カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：老漁夫（面・尉面）、後シテ：源義経の霊（面・平太）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

西国行脚中の都の僧が、讃岐の国（香川県）屋島の浦にやって来ます。穏やかな春の日も暮れて来たので、浜辺の塩屋で一夜を明かそうと思います。そこへ、老若の漁夫が、漁を終えて帰って来ます。僧が老漁夫に宿を求めると、むさくるしい所だと断りますが、僧が都の者と聞くと、なぜかとても懐かしがり、中へ招じ入れます。そして老漁夫は、僧の求めに応じて、屋島での源平合戦の模様を話し始めます。そして、義経の大將ぶり、景清と三保谷の鍛引、佐藤継信の忠死、菊王の最期などを物語ります。その内容があまりに詳しいので、僧が不審に思って名を尋ねると老漁夫は、夜の明け方、修羅の時に名乗ろうといい、義経の幽霊であることをほのめかして消え失せてしまいます。

<中入>

そこへ一人の男がやって来て、そこにいる僧をとがめます。聞くとその男が塩屋の本当の主でした。塩谷の主は、僧の求めに応じて、屋島合戦の際の那須与一の扇の的の話を物語ります。語り終えた塩谷の主は、僧の話から先ほどの老漁夫は義経の霊であろうと判断します。その夜、僧の夢の中に、甲冑姿も凛々しい義経の幽霊が現れ、まだこの八島の地に執心が残っているのだと訴えます。そして、屋島の合戦で、波に流された弓を敵に取られまいと、身を捨てて拾い上げた「弓流し」の有様を再現し、修羅道での平教経との絶え間のない闘いぶりを見せますが、夜明けと共にその姿は消え、浦風の音が聞こえるだけでした。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

智者はまどわず。勇者はおそれずの。やたけ心のあづき弓。かたきにはとり傳えじと。惜むは名の為、おしまぬは。一命なれば。身を捨ててこそ後記にも。佳名をとどむべき。弓筆のあと。なるべけれ。又修羅道の。関の声。矢叫びの音。震動せり。

<カケリ>

今日の修羅の敵はたそ。なに能登の守教経とや。あら物々し手なみは知りぬ。思いぞ出ずる。壇の浦の。そのふないくさ今は早や。その舟軍今は早や。閻浮に帰る生き死にの。海山一同に震動して。舟よりは関の声。陸には波の楯。月に白むは。劍の光。潮に映るは。兜の星のかけ。水や空空行くもまた雲の波の。打ち合い差しちごうる。舟軍のかけひき。浮き沈むとせし程に。春の夜の波よ

り明けて。敵と見えしは群れいる鷗。関の声と聞こえしは。浦風なりけり高松の。浦風なりけり高松の。朝嵐とぞなりにける。

田村（たむら）

【分類】二番目物（修羅物＝勝修羅） *カケリ

【作者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：坂上田村麻呂の霊（面・平太）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

東国の僧が、都見物に来て、三月半ばに清水寺に着き、爛漫と咲いたそがれ時の桜花に見とれていると、箒を手にした一人の童子が現れ、その木陰を清めます。そこで、僧がこの寺の来歴を尋ねると、それに応じて、清水寺建立の縁起を詳しく語ります。また、あたりの名所を教え、ともに桜月夜の風情を楽しみます。その様子が常の人とはどうも違うのを訝った僧が、童子に名を尋ねると、我が名を知りたいのならば帰る方を見て下さいと、田村堂の内陣へと姿を消します。

<中入>

僧が夜通しで桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武將姿の坂上田村麻呂の霊が現れます。そして、勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に千手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした様子を語り、これも観音の仏力であると述べます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

千方といっし逆臣に。仕えし鬼も。王地を侵す天罰にて。千方を捨つればたちまち亡び失せしぞかし。ましてや間近き。鈴鹿山。ふりさけ見れば伊勢の海。ふりさけ見れば伊勢の海。阿濃の松原むらだち来たって。鬼神は。黒雲鉄火をふらしつつ。数千騎に身を変じて山の。如くに見えたる所に。あれを見よ。不思議やな。あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に。千手観音の。光をはなつて虚空に飛行し。千の御手ごとに。大悲の弓には。知恵の矢をはげて。ひとたび放てば千の矢先。雨あられと降りかかって。鬼神の勢に。乱れ落つれば。ことごとく矢先にかかって鬼神は残らず討たれにけり。有難し有難しや直に咒咀諸毒薬念彼。観音の力を合わせて。すなわち還着於本人。すなわち還着於本人の。敵は亡びにけりこれ。観音の。仏力なり。

柏崎（かしわざき）

【分類】四番目物（狂女物） ＊カケリ

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：柏崎某の妻（面・曲見）、

後シテ：柏崎某の妻・狂女（面・曲見）

【あらすじ】（仕舞〔道行〕の部分…下線部）

越後国（新潟県）の柏崎の領主某の従者が鎌倉から帰国し、主人である柏崎の領主が鎌倉で急逝したことを領主の妻に報告します。それを聞いた領主の妻は夫の死を受け入れることなどできないと嘆き悲しみます。さらに、父の死を嘆いて出家するという息子花若からの手紙を目にし、夫と息子という愛する二人を一度に失った領主の妻の嘆きは、わが子への恨みに変わります。しかし、その一方でわが子を守り給えと神仏に祈るのでした。

<中入>

時が過ぎ、信濃国（長野県）の善光寺で、僧の姿をした花若が、住職に伴われて如来堂に向っています。阿弥陀如来へのお勤めを始めて、今日がちょうど満参日に当たるのです。そこへ一人の狂女が現れます。この女こそ、夫の成仏を願ひ、子の無事を願っているうちに、仏に導かれるようにこの善光寺へやって来た柏崎の領主の妻でした。如来堂に上がり、夫の成仏を祈念しようとする狂女に、住職は女人の身で如来堂に上ることは叶わぬゆえ、早々に立ち去るよう伝えます。しかし、狂女は如来堂から立ち去ろうとせずに、供物として持参した夫の形見の烏帽子と直垂を取り出して、自らの心の内を阿弥陀如来に訴え始めます。その狂女の一途な様子を見ていた花若は、自分こそ息子であると狂女の前に名乗り出ます。互いの変わり果てた姿にしばし呆然とする母と子ですが、それが現実であることを知ると、心の底から互いの無事と再会を喜び合うのでした。

【詞章】（仕舞〔道行〕の部分の抜粋）

越後の国府に着きしかば。越後の国府に着きしかば。人目も分かぬわが姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。うら遙々と行くほどに。松陰遠く寂しきは。常盤の里の夕べかや。われにたぐえて。あわれなるはこの里。子ゆえに身を焦がししは。野べの木島の里とかや。降れども積もらぬ淡雪の。浅野というはこれかとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見なして。西に向かえば善光寺。生身の弥陀如来。わが狂乱はさて置きぬ。死して別れし。夫を導きおわしませ。

熊坂（くまさか）

【分類】四、五番目物（切能）

【作者】不詳

【主人公】前シテ：僧（直面）、後シテ：熊坂長範の霊（面・長霊癒見）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

都の僧が東国への旅を志し、都を出て美濃国（岐阜県）赤坂まで来たとき、一人の僧に呼びとめられます。そして、今日が命日の者のために回向をしてくれと、草原の中の古墳に伴われ、その僧の庵室に案内されます。みると、その庵には仏の絵像も木像もなく、大長刀や武具が並べられているので、不審に思って尋ねます。すると、この辺りは山賊夜盗が出るので、通行人の危難を救うための用意で、この土地では頼りにされていると答えます。そして、「お休みあれ」と何処ともなく去って行きます。

<中入>

旅僧は、草庵が消えて、松陰の草むらに座っているのに気がつきます。ちょうど来合わせた土地の者から、この地で討たれた熊坂長範の話聞き、さてはさっきの僧は熊坂の幽霊であったかと思い、読経し回向を始めます。すると、長刀を担いだ熊坂の霊が現れます。そして、ここで奥州へ下る金売り吉次一行を襲ったが、逆に牛若丸によって討たれた次第を物語り、松陰に隠れるように消え失せます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

機嫌はよきぞ。はや。入れと。いうこそほども。ひさしけれ。いうこそほどもひさしけれ。皆われ先にと松明を。投げ込み投げ込み乱れ入る。いきおいはようやく神も。面を向くべきようぞなき。しかれども牛若子。少しも恐るるけしきなく。小太刀を抜いて渡り合い。獅子ふんじん虎らんにう。飛鳥の翔りの手を碎き。攻め戦えばこらえず。表に進む十三人。同じ枕に斬り伏せられ。そのほか手負い太刀を捨て。具足を奪われ這うほう逃げて。命ばかりをのがるもあり。熊坂いうよう。この者どもを手の下に。討つはいかさま鬼神か。人間にてはよもあらじ。盗みも命のありてこそ。あら枝葉や引かんとて。長刀杖に突き。うしろめたくも引きけるが。熊坂思うよう。熊坂思うよう。ものものしその冠者が。斬るといともさぞあるらん。熊坂秘術を奮うならば。いかなる天魔鬼神なりとも。宙に擲んで微塵になし。討たれたる者どもの。いで供養に報ぜんとして。道より取って返し。例の長刀引き側め。折り妻戸を小楯にとって。かの小男を狙いけり。牛若子はお覧じて。太刀抜き側め物間を。少し隔てて待ち給う。熊坂も長刀構え。たがいにかかるを待ちけるが。苛って熊坂左足を踏み。

鉄壁も通れと突く長刀を。はっしと打って。弓手へ越せば。追っかけ透かさず
込む長刀に。ひらりと乗れば刃向きになし。退って引けば馬手へ越すを。おっ
取り直してちょうど斬れば。宙にて結ぶを解く手に。却って払えば飛び上がっ
て。そのまま見えず形も失せて。ここやかしこと尋ねるところに。思いも寄ら
ぬ後より。具足の間隙をちょうど斬れば。こはいかにあの冠者に。斬らるるこ
との腹立ちさよと。いえども天命の。運の極めぞ。無念なる。

遊行柳（ゆぎょうやなぎ）

【分類】三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：老翁（面・三光尉）、後シテ：老柳の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

一遍上人の教えを全国に広めようとしている諸国遊行の僧が、上野国（千葉県）から奥州へと旅します。白河の関を越えて、新道を行こうとすると老人が現れ、声をかけます。老人は、先代の遊行上人が通ったのは、その新道ではなく、古道と呼んでいる昔の道だといい、またそこには朽木の柳という名木があると教えます。そして、僧をそちらへ案内します。もう今はあまり人の通わなくなり、草の生い茂った古道をついて行くと、古塚の上に柳の老木があります。僧がこの柳のいわれを尋ねると、老人は昔、西行がこの地へ旅し、「道のべに 清水流るる 柳かげ しばしとてこそ 立ちどまりつれ」という歌を詠んだことを教えます。そして、僧に求めて十遍の念仏を授かると、古塚に姿を消してしまいます。

<中入>

僧は通りかかった土地の者からも、朽木の柳のいわれを聞き、先程の老人の話をして、土地の者は驚いて、再度、奇特を見るように勧めます。その夜、古塚のそばで、僧が念仏を唱え、仮寝をしていると、柳の精が白髪の老翁姿で現れます。そして、夕刻、ここに案内した者だと明かし、草木の霊まで成仏することのできる念仏の功德をたたえます。さらに柳にちなむ和漢の故事をひき、楊柳観音や蹴鞠のこと、さらに「源氏物語」の柏木の恋の話へと次々と話題を広げてゆき、十遍の念仏への報謝の舞を心静かに舞って見せます。僧が夜明けの風に目覚めると、そこには朽木の柳が立っているだけした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

そのかみ洛陽や。清水寺のいにしえ。五色に見えし瀧波を。尋ねのぼりし水上に。金色の光さす。朽木の柳たちまちに。楊柳観音とあらわれ。今に絶えせぬ跡とめて。利生あらたなる。歩みを運ぶ霊地なり。されば都の花盛り。大宮人の御遊にも。蹴鞠の庭の面。四本の木蔭枝たれて。暮に数ある沓の音。柳桜をこきまぜて。錦をかざる諸人の。花やかなるや小簾の隙洩りくる風の匂いより。手飼の虎の引綱も。長き思いに楢の葉の。その柏木の及びなき。恋路もよしなしや。これは老いたる柳色の。狩衣も風折も。風にただよう足もとの。弱きもよしや老木の柳。気力なうしてよわよわと。立ち舞うも夢人を。現と見るぞはかなき。

鵜（ぬえ）

【分類】四・五番目物（尾能）

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：舟人（面・怪士）、後シテ：鵜の霊（面・小飛出）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国を行脚する旅の僧が、三熊野へ参詣した後、都に上る途中、摂津国（兵庫県）芦屋の里に着きます。土地の者に宿を乞いますが、旅人に宿を貸すことが禁制になっているとのことで、洲崎の御堂で一夜を明かすことにします。夜更け頃、そこへ異様な風体をした者が、丸木舟に乗って漕ぎ寄せて来ます。不審に思って言葉をかけると、自分は近衛院の御代に、頼政の矢先にかかって命を失った鵜の亡魂であると名乗り、その射止められたときの模様を詳しく語ります。僧は回向をし、成仏をすすめますが、舟人はまた丸木舟に乗って夜の波間に消えて行きます。

<中入>

土地の者が見舞いに来たので、旅僧は頼政の鵜退治の物語を所望します。語り終えた土地の者は、鵜の亡霊への供養をすすめて帰って行きます。僧が海辺で読経していると、鵜の亡霊が現れ、供養を感謝します。そして、夜毎に帝を悩ましたため、頼政に退治されたことを語り、これも天罰であったと懺悔し、頼政はその功で、主上より御剣を賜ったこと、その時氏の大臣の歌のやりとりがあり、それでも名を上げたことを物語ります。そして、自分はウツボ舟に入れられて淀川に流され、この芦屋の浮き洲にとどまって成仏できないでいたのだと言い、僧の回向を頼んで、海中へと消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

東三条の林頭に。しばらく飛行し。丑みつばかりの夜な夜なに。ご殿の上に。飛び蔽えば。すなわちご悩。しきりにて。すなわちご悩しきりにて。玉体をなやまして。怯えまぎらせ給うことも。わがなす業よと怒りをなししに。思いもよらざりし頼政が。矢先に当れば変身うせて。らくらくらいらいと地に倒れて。たちまちに滅せしこと。思えば頼政が。矢先よりは君の天罰をあたりけるよと。今こそ思ひ知られたれ。そののち主上御感あって。獅子王という御剣を。頼政にくだされけるを宇治の。大臣賜わりて。階を下りたもうに。おりふし郭公音ずれば。大臣とりあえず。ほととぎす。名をも雲居に。あぐるかなと。仰せられければ。頼政。右の膝をついて。左の袖をひろげ。月をすこし目にかけて。弓張月の。いるに任せてと。つかまつり御剣をたまわり。ご前をまかり帰れば。頼政は名をあげてわれは。名を流すうつお舟に。おし入れられて淀川の。

淀みつ流れつゆく末の。鶴殿も同じ芦の屋の。浦わの浮きすに。流れかかって。
朽ちながらうつお舟の。月日も見えず暗きより。冥き道にぞ入りにける。はる
かに照らせ山の端の。はるかに照らせ山の端の月と共に。海月も入りにけり。
海月とともに。入りにけり。

竹生島（ちくぶしま）

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物） ＊舞働

【作者】 金春禅竹

【主人公】 前シテ：漁翁（面・尉面）、後シテ：龍神（面・黒髭）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

延喜帝（醍醐天皇）に仕える朝臣が、竹生島明神に参詣を志し、琵琶湖畔までやって来ます。丁度、老人が若い女をともなって釣舟を出しているのので、それに、声をかけて便船をたのみます。老人は快く彼を舟に乗せ、のどかな浦々の春景色を楽しみながら、竹生島に向かいます。竹生島に到着すると、老人は朝臣を神前に案内します。朝臣は、つれの女も一緒に来るので、この島は女人禁制と聞いているがと、不審がると、老人と女は、弁才天は女性の神であるから、女人を分け隔てはしないと、こもごもこの島の明神の由来を語ります。やがて二人の者は、実は人間ではないとあって、若い女は社殿の扉の内に入り、老人は波間にその姿を消します。

<中入>

そのあと、弁才天の社人が出て、朝臣に宝物を見せます。そうしているうちに、社殿が鳴動し、光輝き、音楽も聞えたと思うと弁才天が出現し、舞を舞います。続いて湖上が波立つと見るや、龍神が水中より現れて、朝臣に金銀珠玉の玉を捧げ、激しい舞を見せます。そして、弁才天と龍神とは仏が衆生を救うための二つの形であるといい、国土鎮護を約束し、弁才天は再び社殿に入り、龍神は湖水へと飛んで入ります。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

龍神湖上に出現して。龍神湖上に出現して。光もかかやく金銀珠玉を。かのまれ人に。捧ぐるけしき。ありがたかりける。奇特かな。

<働>

もとより衆生済度の誓。もとより衆生済度の誓。さまざまなれば。あるいは天女の形を現じ。有縁の衆生の願をかなえ。または下界の竜神となって。国土を守る。誓を現わし。天女は宮中に入らせ給えば。竜神は湖水の上にかけて。波を蹴たて。水を返して天地に群がる大蛇の形。天地に群がる大蛇のかたちは。竜宮に飛んでぞ。入りにける。

猩々（しょうじょう）

【分類】五番目物（祝言物） *中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰っていきました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

御酒と聞く。御酒と聞く。名もことわりや。秋風の。吹けども吹けども。さらに身には。寒むからじ。ことわりや白菊の。理や白菊の。着せ綿を温めて。酒をいざや汲もうよ。まれ人もご覧ずらん。月星は隈もなし。所は潯陽の。江の内の酒盛。猩々舞を舞おうよ。芦の葉の笛を吹き。波の鼓。どうど打ち。声澄み渡る浦風の。秋の調べや残るらん。

<中ノ舞>

有難や。御身心すなおなるにより。この壺に泉をたたえ。ただ今返えし。授くるなり。よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変わらぬ秋の夜の盃。影も傾むく入江にかれ立つ。足もとはよろよろと。酔に伏したる枕の夢の。醒むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

田村（たむら）

【分類】二番目物（修羅物＝勝修羅） ＊カケリ

【作者】不詳

【主人公】前シテ：童子（面・童子）、後シテ：坂上田村麻呂の靈（面・平太）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

東国の僧が、都見物に来て、三月半ばに清水寺に着き、爛漫と咲いたそがれ時の桜花に見とれていると、箒を手にした一人の童子が現れ、その木陰を清めます。そこで、僧がこの寺の来歴を尋ねると、それに応じて、清水寺建立の縁起を詳しく語ります。また、あたりの名所を教え、ともに桜月夜の風情を楽しみます。その様子が常の人とはどうも違うのを訝った僧が、童子に名を尋ねると、我が名を知りたいのならば帰る方を見て下さいと、田村堂の内陣へと姿を消します。

<中入>

僧が夜通しで桜の木陰で経を読んでいると、威風堂々たる武将姿の坂上田村麻呂の靈が現れます。そして、勅命を受けて、鈴鹿山の賊を討伐すべく軍を進めたが、合戦の最中に千手観世音が出現し、その助勢によって、敵をことごとく滅ぼした様子を語り、これも観音の仏力であると述べます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

千方といっし逆臣に。仕えし鬼も。王地を侵す天罰にて。千方を捨つればたちまち亡び失せしぞかし。ましてや間近き。鈴鹿山。ふりさけ見れば伊勢の海。ふりさけ見れば伊勢の海。阿濃の松原むらだち来たって。鬼神は。黒雲鉄火をふらしつつ。数千騎に身を変じて山の。如くに見えたる所に。あれを見よ。不思議やな。あれを見よ不思議やな。味方の軍兵の旗の上に。千手観音の。光をはなつて虚空に飛行し。千の御手ごとに。大悲の弓には。知恵の矢をはげて。ひとたび放てば千の矢先。雨あられと降りかかって。鬼神の勢に。乱れ落つれば。ことごとく矢先にかかって鬼神は残らず討たれにけり。有難し有難しや直に咒咀諸毒薬念彼。観音の力を合わせて。すなわち還着於本人。すなわち還着於本人の。敵は亡びにけりこれ。観音の。仏力なり。

葛城（かずらき）

【分類】三番目物（鬘物） *序ノ舞

【作者】不詳

【主人公】前シテ：里女（面・増女）、 後シテ：葛城の明神（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

出羽国（山形県）の羽黒山から出た山伏が、大和国（奈良県）の葛城山へとやって来ます。折しも降りしきる雪に悩んでいると、一人の里女が現れ、彼女の庵に案内し、焚火をしてもてなしてくれます。そして、雪の中で集めて束にした木々の細枝を標〔しもと〕と呼ぶのだといい、「標結ふ葛城山に降る雪の、問なく時なく思ほゆるかな」という古歌もあると教えてくれます。山伏は好意を謝し、やがて後夜の勤行を始めようとする、女は、お勤めのついでに加持祈祷をして、自分の三熱〔さんねつ〕の苦しみを助けて下さいと頼みます。山伏は不審に思って、その素性を尋ねると、自分は葛城の神であるが、昔、役〔えん〕ノ行者に命ぜられた岩橋を架けなかったため、不動明王の索に縛られ苦しんでいるとあって消え失せます。

<中入>

そこへ麓の男がやって来たので、葛城山の岩橋の故事について尋ねます。その話を聞き、先程の女の事など思いあわせ、奇特なことと思い、夜もすがら女神のために祈祷します。すると、その修法にひかれて、葛城の神が現れ、三熱の苦を免れた喜びを述べ大和舞を舞い、明け方近くなると、岩戸の内へ姿を隠します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

高天の原の岩戸の舞。高天の原の岩戸の舞。天の香久山も向いに見えたり。月白く雪白く。いずれも白妙の。景色なれども。名に負う葛城の。神の顔かたち。面なや面はゆや。恥かしやあさましや。あさまにもなりぬべき。明けぬ先にと葛城の。明けぬ先にと葛城の夜の。岩戸にぞ入り給う。岩戸の内にぞ入り給う。

融（とおる）

【分類】五番目物（切能＝貴人物） ＊早舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：汐汲みの老人（面：三光尉）、後シテ：源融の霊（面：中将）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

東国から京へ上った諸国一見の旅僧が六条河原の院を訪れ有り、休んでいると、そこへ田子を担った老人がやって来ます。僧は、ここは海辺でもないのに汐汲み姿をしているのはどうしてかと尋ねます。すると老人は、ここは塩釜の浦を写した海辺だと答え、その昔に左大臣源融が塩釜の浦を模して造園し、毎日難波の浦から海水を運ばせて、塩を焼かせるという風流を楽しんだが、今はすっかり荒れ果てていると語ります。そして京の山々の名所を指し示しながら教えると、そろそろ汐を汲む頃合いだと見て消え失せます。

<中入>

僧は来合わせたこの辺りの者に、老人は源融の霊だろうと教えられ、弔うよう勧められます。僧は、その夜は夢の出会いを期待しながら旅寝をします。すると貴人姿の融大臣が現れ、名月の下で舞をまい、夜明けと共に消えて行きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

それは西岫に。入日のいまだ近ければ。その影に隠さるる。たとえば月のある夜は。星の薄きがごとくなり。青陽の春の始めには。霞む夕べの遠山。眉墨の色に三日月の。影を舟にもたとえたり。また水中の遊魚は。釣針と疑い。雲上の飛鳥は。弓の影とも驚く。一輪もくみならず。万水ものぼらず。鳥は池辺の木に宿し。魚は月下の波に伏す。聞くとも飽かじ秋の夜の。鳥も鳴き。鐘も聞こえて。月も早。影傾きて明け方の。雲となり雨となる。この光陰に誘われて。月の都に。入りたもう粧い。あら名残おしの面影や。名残おしの面影。

鵜飼（うかい）

【分類】五番目物（鬼物＝鬼神物） ＊カケリ

【作者】榎並左衛門五郎原作、世阿弥改作

【主人公】前シテ：鵜使いの老人（面・三光尉）、後シテ：閻魔王（面・小癒見）

【あらすじ】（仕舞『鵜ノ段』の部分…下線部）

安房国（千葉県）の清澄の僧が、甲斐国（山梨県）への行脚を志し、途中、石和川のほとりに着きます。その土地の人に、一夜の宿を頼みますが、旅の者に宿を貸すことは禁制だと断られます。その代わりに、川辺の御堂を教えられ、そこに泊まることにします。するとそこに一人の老人が鵜を休めるために立ち寄り、僧が、老人なのにいつまでも殺生するのはやめて、他の職業についたらと意見をすると、老人は、自分は若い時からこの仕事で生計を立ててきたので、今さらやめるわけにはいかないと答えます。従僧が、二、三年前にこの地を訪れた時、このような老人に会い、もてなしを受けたと話すと、老人はその鵜使いは禁漁を犯したため殺されたと言ひ、実は自分がその亡霊だと明かします。僧のすすめで亡者は罪業消滅のため鵜飼のさまを見せて消えてゆきます。

<中入>

僧たちはやって来た先刻の土地の者からも、密漁をして殺された男の話聞き、先ほどの老人こそ鵜使いの化身であったと信じ、法華經の文句を川辺の石に一字ずつ書いて川に沈めて回向します。すると地獄の鬼が現れて、かの鵜使いは地獄へ墮ちるはずであったが、生前、僧を接待した功德と、法華經の効力によって救われ、極楽へ送ることになったと告げ、法華經のありがたさをたたえます。

【詞章】（仕舞『鵜ノ段』の部分の抜粋）

湿る松明振り立てて。藤の衣の玉襷。鵜籠を開き取り出し。鳥つ巢おろし荒鵜ども。この川波に。ぱっと。放せば。おもしろの有様や。おもしろの有様や。底にも見ゆる篝火に。驚く魚を追い回し。潜きあげ掬いあげ。隙なく魚を食う時は。罪も報いも後の世も。忘れ果てて面白や。みなぎる水の淀ならば。生け簀の鯉やのぼらん。玉島川にあらねども。小鮎さ走るせぜらぎに。かだみて魚はよもためじ。不思議やな篝火の。燃えても影の暗くなるは。思い出でたり。月になりゆく悲しさよ。鵜舟のかがり影消えて。闇路に迷うこの身の。名残惜しさを如何にせん。名残惜しさを。如何にせん。

猩々（しょうじょう）

【分類】五番目物（祝言物） *中ノ舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰っていきました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽によって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども
変らぬ。秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ。足元はよろよろと。酔いに伏
したる枕の夢の。覚むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

高砂（たかさご）

【分類】初番目物（脇能＝男神物） ＊神舞

【作者】世阿弥

【主人公】前シテ：尉（面・小尉）、後シテ：住吉明神（面・邯鄲男）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

阿蘇の宮の神主・友成は、都見物を思い立ち旅に出ます。途中、播州高砂に立ち寄り、浦の景色を眺めていると、そこへ熊手と杉箒を持った老夫婦がやって来て、松の木陰を掃き清めます。友成は、有名な高砂の松はどれかと尋ね、また、高砂の松と住吉の松とは場所が離れているのに、なぜ相生の松と呼ばれるのかと、尋ねます。老人は、この松こそ高砂の松であると語り、たとえ場所を隔てていても夫婦の仲は心が通うものだ、現にこの姥は当所の者、尉は住吉の者だと言います。そして老夫婦は、さまざまな故事を引いて松のめでたさを語り、御代を寿ぎます。やがて二人は、実は相生の松の精であることを明かし、住吉でお待ちしていると告げて、小舟に乗って沖の方へ消えていきます。

<中入>

友成は、土地の者に再び相生の松のことについて聞き、先程の老夫婦の話をすると、それは奇なことだから、早速自分の新造の舟に乗って住吉へ行くことを勧められます。そこで、友成たちも高砂の浦から舟で住吉へ急ぎます。住吉へ着くと、残雪が月光に映える頃、住吉明神が出現し、千秋万歳を祝って颯爽と舞います。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

われ見ても久しくなりぬ住吉の。岸の姫松いく世経ぬらん。むつましと君は知らずや瑞がきの。久しき世々の神かぐら。夜のつづみの拍子を揃えて。すゞしめ給え。宮づこたち。西の海。あおきがはらの波間より。あらわれいでし。住の江の。春なれや。残の雪のあさかがた。玉藻かるなる岸陰の。松根によって腰をすれば。千年の緑。手にみてり。梅花を折って。首にさせば。二月の雪。ころもに落つ。

<神舞>

有難の影向や。有難の影向や。月すみよしの神あそびみかげを拝むあらたさよ。げにさまぎまの舞姫の。声もすむなり住の江の。松陰もうつるなる。青海波とはこれやらん。神と君との道すぐに。都の春にゆくべくは。それぞ還城楽の舞。きて万歳の。小忌衣。指すかいなには。悪魔を払い。おさむる手には。壽福をいだき。千秋楽は民をなで。万歳楽には命をのぶ。相生の松風。さっさっの声ぞ楽しむ。さっさっの声ぞ楽しむ。

枕慈童（まくらじどう）

【分類】初、四番目物（遊樂物） *楽

【作者】不詳

【主人公】シテ：慈童（面：童子）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

古代中国、魏の文帝の時代、酈縣山の麓から霊水が流れ出るといので、勅使が源を尋ねるべく、その山に派遣されます。勅使の一行は、菊の花の咲き乱れた山中の庵に、一人の不思議な少年を見つけます。勅使が「人間の住まないような山奥にいるお前は化生の者か」と尋ねると、少年は「あなたこそ化生の者でしょう。私は周の穆王に仕えていた侍童です」と答えます。勅使は「周というのはもう数代も前の世だ」と驚きます。話を聞くと、少年は、穆王に召し使われていたが、誤って王の枕をまたぎ、その罰でこの山に配流されます。しかし、少年に悪意のないことを知って憐れんだ王が、その枕に二句の偈（仏徳を讃えた詩）を書きそえて与えました。その文字を菊の葉の上に写して書くと、その葉の露が霊薬となり、それを飲んでいたため、少年は七百年後の今でも若いまま生きながらえていたのです。少年自身も、自分の長命に驚き、楽しく舞を舞ったあと、寿命を帝に捧げ、そのまま山中の仙家へと帰ってゆきます。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

枕の要文、疑いなく。具一切功德、慈眼視衆生。福寿海無量、是故応頂礼。この妙文の菊の葉に。置くしただりや露の身の。不老不死の薬となりて。七百歳を送りぬる。汲む人も汲まざるも。延ぶるや千歳なるらん。面白の遊舞やな。
<楽>

ありがたの妙文やな。すなわちこの文菊の葉に。すなわちこの文菊の葉に。ことごとく現わる。さればにや。雫もこうばしく滴も匂い。澗ともなるや谷陰の水の。所は酈縣の山のしただり。菊水の流れ。泉はもとより酒なれば。汲みては勧め。すくいては施し。わが身も飲むなり飲むなりや。月は宵の間。その身も酔いに。引かれてよろよろよろよろと。ただよい寄りて。枕を取りあげ。いただき奉り。げにもありがたき君の聖徳と。岩根の菊を。手折り伏せ手折り伏せ。敷妙の袖枕。花を莖に伏したりけり。もとより薬の酒なれば。もとより薬の酒なれば。酔いにも侵されず。その身も変わらぬ七百歳を。保ちぬるも。このおん枕のゆえなれば。いかにも久しく。千秋の帝。万歳のわが君と。祈る慈童が七百歳を。わが君に授けおき、所は酈縣の。山路の菊水。汲めや掬べや。飲むとも飲むとも。尽きせじや尽きせじと。きくかき分けて、山路の仙家に。そのまま慈童は。入りにけり。

紅葉狩（もみじがり）

【分類】五番目物（鬼畜物） *中ノ舞（途中から急ノ舞、序ノ舞にも）

【作者】観世小次郎信光

【主人公】前シテ：上臈（面・増女）、後シテ：鬼女（面・般若）

【あらすじ】（舞囃子の部分…下線部）

秋も半ばの頃、所は信濃国(長野県)戸隠山へ、とある上臈が、数人の侍女を連れて、紅葉狩にやって来て、山陰で酒宴を始めます。そこへ、鹿狩りに来た平維茂とその従者が通りかかります。そして、この山中での人影を不審に思い、従者に名を尋ねさせにやります。女達は、名を名乗りませんが、身分の高い女性の忍び遊びだという事です。維茂は、その興を妨げないようにと、馬から降り、道を替えて通りすぎようとします。すると女達は、その心づかいにかえって感心し、維茂を引き留め、酒宴を共にするように誘います。維茂は断りかね、勧めに応じて盃を重ね、美女の舞う見事な舞に見とれます。いつしか酔がまわって、維茂は寝入ってしまいます。女達はそれを見届けると、鬼の本性を現わし、「目を覚ますな」といいすてて、山中に姿を消します。

<中入>

すると八幡宮の末社の神が、維茂の前に現われ、神剣を授け、鬼神を退治するように神勅を伝えます。目を覚ました維茂は、神剣を押しいただき、身支度をして待ち構えます。やがて山中に稲妻が光り、雷鳴がとどろいて騒然となります。そして、本性を現わした鬼女が襲いかかって来ます。維茂は刀を抜いて応戦し、激しい格闘の末、ついに鬼女を斬り伏せます。その威勢は真に立派なものでした。

【詞章】（舞囃子の部分の抜粋）

よしや思えばこれとても。前世のちぎり浅からぬ。深き情の色見えて。かかる折しも道の辺の。草葉の露のかごとをも。かけてぞ頼む行くすえを。契るもはかなうちつけに。人の心は白雲の。立ちわずらえる。景色かな。かくて時刻も移り行く雲に嵐の声すなり。散るか正木の葛城の。神の契りの夜かけて。月の杯さす袖も。雪をめぐらす袂かな。たえず紅葉。

<中ノ舞から急ノ舞>

たえず紅葉。青苔の地。たえず紅葉。青苔の地。またこれ涼風暮れゆく空に。雨うちそそぐ夜嵐の。ものすさまじき山陰に月待つほどのうたた寝に。片敷く袖も露深し。夢ばし覚ましたもうなよ。夢ばし覚まし。たもうなよ。

小袖曾我（こそでそが）

【分類】四番目物（現在物） *男舞

【作者】不詳

【主人公】シテ：曾我十郎祐成（直面）

【あらすじ】（独吟の部分…下線部）

曾我十郎と五郎の兄弟は、源頼朝が富士の裾野で巻狩を行うので、この機会に親の敵工藤祐経を討とうと決心します。そうして、それとなく暇乞いをするため、また、五郎の勘当の許しも得ておこうと、母のもとを訪れます。まず、十郎が案内を求めると、母は喜んで迎え入れますが、五郎には出家になれという母の命にそむいたというので怒って会おうとしません。十郎はこのたび兄弟そろって御狩に出ようとしたのに、弟を許してくださらないのは、私の身をも思ってくださらないことになるのです。また、五郎は箱根にいた間母上のことを思い、亡き父の回向に心を尽くしていたのですと、いろいろと弟のためにとりなし、母に怨みを述べて、弟と共に立ち去ろうとします。すると兄弟の心が通じ、母もようやく五郎の勘当を許します。二人は喜びの酒を酌み交わし、共に立って舞い、これが親子最後の対面かと名残もつきませんが、狩場に遅れてはならぬと、母に別れのあいさつをして、勇んで出立します。

【詞章】（独吟の部分の抜粋）

このほど時致が。このほど時致が。尽す心に引きかえて。今はいつしか思い子の。母の情ありがたや。あまりの嬉しさに祐成。お酌に立ちてとりどり。時致とともに。祝言を。謡うこえ。高き名を雲居にあげて富士の嶺の。雪をめぐらす。舞のかざし。いかに面一さし舞い候え。畏って候。雪をめぐらす。舞のかざし。舞のかざしのその隙に。舞のかざしのその隙に。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思えば涙も尽きせぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。互に思う瞋恚の焰。胸の煙を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終にはその名をとめなば兄弟。親孝行の。ためしにならん。嬉しさよ。

橋弁慶（はしべんけい）

【分類】二、四、五番目物（雑能＝現在物） ＊イロエ

【作者】不詳

【主人公】前シテ：武蔵坊弁慶（直面〔ひためん＝素顔〕）、

後シテ：武蔵坊弁慶（面・長霊癒見）

【あらすじ】（独吟の部分…下線部）

比叡山西搭の近くに住む武蔵坊弁慶は、ある願い事があって、北野の天神へ丑の刻詣をしています。ちょうど今夜が満願なので出かけようとする、従者は昨夜、五条の橋に十二、三歳の少年が出て、通行人を小太刀で斬って廻ったとのことだからと、今夜の参詣をやめるようにいいます。弁慶が、大勢で捕まえばいいのにと言うと、従者は、目にもとまらぬ早業で、広い都にもあれ程の者はいない、多分、人間ではなく化生の者だとの事と答えるので、弁慶も一度は思いとどまります。しかし、弁慶ほどの者が聞き逃げは無念と、かえって討ち取る決心を固めて、五条の橋へ向かいます。

<中入>

牛若は、母の命により、明日からは鞍馬山へ上ることとなっているので、今夜を名残りとして五条橋へ行き、通る人を待っています。そこへ大鎧に身をかため、大長刀を肩にした弁慶がやって来ます。弁慶は、女装をしている牛若に気を緩めて、通り過ぎようとする、牛若は大長刀の柄を蹴り上げます。怒った弁慶が斬りかかりますが、散々に牛若にもてあそばれます。弁慶は、牛若と聞いて降参し、主従の契りを結んで、九条の邸へお供します。

【詞章】（独吟の部分の抜粋）

すわしれ者よ。もの見せんと。長刀やがて。取り直し。長刀やがて取り直し。いでもの見せん手なみのほどと。切ってかかれば牛若は。少しも騒がずつ立ちなおって。薄衣引きのけつつ。しづしづと太刀抜きはなち。つつ支えたる長刀の。きっさきに太刀打ちあわせ。つめつ開いつ戦いしが。なにとかしたりけん。手もとに牛若寄るとぞ見えしが。たたみ重ねて打つ太刀に。さしもの弁慶合わせかねて。橋桁を二三間。しきって肝をぞ消したりける。ものものしあれほどの。小姓一人をさればとて。手もとにいかで洩らすべきと。長刀柄長くおっ取りのべて。走りかかってちょうど打てば。そむけて右に飛びちごう。取りなおして裾を薙ぎ払えば。躍りあがって足もためず。宙を払えば頭を地につけ。ちぢに戦う大長刀。打ち落とされて力なく。組まんとならば切り払う。すがらんとするも便りなし。せん方なくて弁慶は。希代なる少人かなとて。あきれはててぞ立ったりける。

玉葛（たまかすら）

【分類】四番目物（雑能） ＊カケリ

【作者】金春禅竹

【主人公】前シテ：女舟人（面・増女）、後シテ：玉葛内侍の亡霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

諸国一見の旅の僧が、奈良の社寺を巡拝の末、初瀬の長谷観音へと参詣に出かけます。初瀬川のあたりまで来ると、一人の女性が、底も浅い山川の岩間伝いに小舟に樟さしてやって来ます。不審に思っ言葉をかけると、女は自分も長谷寺へ詣でる者ですと答え、「海士小舟初瀬の川」と古歌にも詠まれていますから、舟に乗っていても不思議ではありますまいと答えます。そして、僧を二本の杉の木へと案内し、玉葛内侍が筑紫から都へ逃げ上り、ここへ来たところ、母夕顔の侍女右近に巡り会ったことなどを語り、自分はその玉葛の亡霊であるとほのめかして消え失せます。

<中入>

僧が哀れに思っ、読経していると、玉葛の亡霊が現れ出で、乱れた思いに狂い舞いますが、やがて昔のことを懺悔して妄執を晴らし成仏したと見えるや、僧の夢も覚めました。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

げに妄執の雲霧の。げに妄執の雲霧の。迷いもよしやうかりける。人を初瀬の山おろし。はげしく落ちて。露も涙も。散りぢりに秋の葉の身も。朽ちはてね怨めしや。怨みは人をも世をも。怨みは人をも世をも。思いおもわした身ひとつの。報いの罪やかずかずの。浮き名に立ちしを懺悔の有様。あるいは湧きかえる。岩もる水の思いにむせび。或いはこがるるや身より出ずる。玉と見るまで包めども。ほたるに乱れつる。影もよしなや恥ずかしやと。この妄執をひるがえす。心は真如の玉葛。心は真如の玉葛。長き夢路は覚めにけり。

天鼓（てんこ）

【分類】四番目物（遊樂物・唐物） *楽

【作者】不詳

【主人公】前シテ：天鼓の父・王伯（面・小尉）、 後シテ：天鼓の霊（面・童子）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

昔、中国に王伯王母という夫婦がいました。妻は天から鼓が降り下り、胎内に宿る夢を見て一子を生み、その名を天鼓とつけました。その後本物の鼓が天から下り、その子供の手に入ります。それは実に美しい音を出します。その噂を伝え聞いた天子が、鼓を献上するように命じます。少年はそれを拒んで山中に逃げたが、探し出され、鼓は召し上げられ、その身は呂水に沈められてしまいます。宮中に運び込まれたその鼓は、その後、誰が打っても音を出しません。

[ここまでは能では演じられません]

そこで、勅使が少年の老父のもとにつかわされ、宮中へ来て鼓を打つように命ぜられます。愛児を失った老父は、日夜悲嘆に泣いていますが、勅命を受け、自分も罰せられる覚悟で参内します。恐れかつ懐かしむ心で鼓を打つと、不思議にも妙音を発しました。この奇跡に、天子も哀れを感じ、老父に数多の宝を与えて帰らせます。

<中入>

そして天鼓のために、呂水の堤で、追善の管絃講（音楽法要）を行います。すると天鼓の霊が現われ、今は恨みも忘れて手向けの舞楽を謝し、自ら供えられた鼓を打ち、楽を奏し、喜びの舞を舞って興じます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の風。柳葉を。払って月も涼しく。星も相逢う空なれや。烏鶺の橋のもとに。紅葉を敷き。二星の館の前に風冷やかに夜もふけて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波。立ちそうや呂水の堤の。月にうそむき水にたわむれ。波をうがち。袖を返すや。夜遊の舞楽も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのぼのと。夜も明け白む時の鼓。数は六つの巷の声に。また打ち寄りて現か夢か。またうち寄りて現か夢。幻とこそなりにけれ。

楊貴妃（ようきひ）

【分類】 三番目物（本鬘物） *序ノ舞

【作者】 金春禪竹

【主人公】 シテ：楊貴妃の霊（面・小面）

【あらすじ】

安祿山の乱の時（756年）、馬嵬が原〔ばかいがはら〕で殺された楊貴妃のことを忘れかねた唐の玄宗皇帝は、神仙の術を会得した方士に命じて、彼女の魂魄のありかを尋ねさせます。方士は天上から黄泉まで探しますが見当たらず、最後に常世の国の蓬莱宮へとやって来ます。そして所の者に尋ねると、太真殿という御殿に玉妃という人がいるというので、その建物を見つけ、様子をつかがいます。すると中から、昔を偲ぶ詠嘆の声がもれて来ます。そこで方士が、唐の天子の使者だと名乗ると、貴妃は驚いて帳を押し除け、簾をかかげて、姿を見せます。方士が使いの趣を述べると、貴妃は皇帝との昔を懐しみ、憂いに沈みます。方士は、貴妃の見つかった事を急ぎ帰って報告するので、会った証に形見の品を請います。貴妃は髪にさしていた玉のかんざしを渡しますが、方士は、このような珍しからぬ品よりも、帝とひそかに契られたお言葉があれば、それを聞かせてほしいといひます。貴妃は、七夕の夜、天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と、その愛の永遠を誓ったことを打ち明けます。そして、その誓いも空しく、私ばかりが遠くへ来てしまったが、できれば未来でお目にかかりたいと伝えてほしいといひます。さらに自分はもとは上界の仙女であった身の上について語り、舞を舞って見せ、形見の品を持って帰る方士を一人寂しく見送ります。

【詞章】（今回は※の部分省略して演じます。）

ワキ「わがまだ知らぬ東雲の。わがまだ知らぬ東雲の。道をいづくときだめん。
これは唐の玄宗皇帝に仕え奉る方士にて候。さてもわが君政ただしくまします
中にも。また色を重くし艶を専らとし給うにより。容色無双の美人を得たもう。
御寵愛ならびなし。すなわち貴妃に定めらる。楊家の御娘たるが故に。その名
を楊貴妃と号す。しかれどもさる事ありて馬嵬が原にて失い奉りて候。君御歎
き限りなし。せめての事に魂魄のありかを尋ねて参れとの宣旨を蒙り。上碧落
下黄泉まで尋ね奉れども。さらに魂魄のありかを知らず候。未だ蓬莱宮に至ら
ず候ほどに。急ぎかの島にわたり。御ゆくえを尋ねばやと存じ候。
ワキ「尋ねゆく。まぼろしもがな。つてにても。まぼろしもがなつてにても。
魂のありかはそことしも。波路をわけてゆく船の。ほのかに見えし。島山の。
草の仮寝の枕ゆう。とこ世の国に着きにけり。とこ世の国に着きにけり。

(ワキ、着セリフの後、所の者〔狂言〕と問答)

ワキ「ありし教えに随ってこの蓬莱宮に来て見れば。宮殿盤々としてさらに辺際もなく。莊嚴巍々としてさながら七宝をちりばめたり。漢宮万里のよそおい。長生驪山の有様も。これには更になぞらうべからず。あら美しの所やな。教えの如くこれに太真殿とうちたる額の候。しばらくこのあたりを徘徊し。事のよしをも窺わばやと存じ候。

シテ「あらものすごの。宮中やな。あらものすごの。宮中やな。昔は驪山の春の園に。ともに眺めし花の色。移れば変る世の中とて。今は蓬莱の秋の洞に。ひとり眺むる月影も。ぬるる顔なる袂かな。あら恋しのいにしえやな。

ワキ「いかにこの宮のうちに申すべき事の候。唐の天子の勅の使。方士これまで参りたり。玉妃は内にましますか。

シテ「なに唐帝の使とは。なにしにこれまで来れるぞとて。九花の帳をおしのけて。玉の簾をかかげつつ。

ワキ「立ちいで給う御姿を見れば。

シテ「雲のびんずら。

ワキ「花の顔ばせ。

シテ、ワキ「寂寞たる御まなこのうちに。涙を浮かめさせ給えば。

地謡「梨花一枝雨をおびたる。よそおいの。雨をおびたる粧の。太液の芙蓉のくれない。未央の柳の緑もこれにはいかでまさるべき。げにや六宮の粉黛の。顔色のなきも理や。顔色のなきもことわりや。

ワキ「勅諭のおもむき真直に申し上げばやと存じ候。さてもさても后宮世にましましし時だにも。朝政は怠り給いぬ。いわんやかくならせ給いて後は。ただひたすらの御歎きに。御命もあやうく見えさせ給いて候。せめてのことに御ゆくえを尋ねてまいれとの宣旨を蒙り。これまでまいり。御姿をおがみ奉ること。ただこれ君の御志。あさからざりし故と思えば。いよいよ御いたわしうこそ候え。

シテ「げにげに汝が申す如く。今は甲斐なき身の露の。数にもあらぬ玉のありかを。かように尋ね給うこと。御情には似たれども。訪うにつらさのまさり草。かれがれならばなかなかの。便りの風は恨めしや。まった今さらの恋慕の涙。旧里を思う魂をけす。

ワキ「さてもあるべきことならねば。急ぎ帰りて奏聞せんさりながら。

御かたみの物をたび給え。

シテ「これこそありし形見よとて。玉のかんざしとりいでて。方士に与えたびければ。

ワキ「いやとよこれは世の中に。たぐいあるべき物なれば。いかでか信じ給うべき。御身と君と人知れず。契り給いし言の葉あらば。それをしるしに申すべ

し。

シテ「げにげにこれは理りなり。思いぞいづるわれもまた。その初秋の七日の夜。二星に誓いし。言の葉にも。

地謡「天にあらば願わくは。比翼の鳥とならん。地にあらば願わくは。連理の枝とならんと。誓いし事を。ひそかに伝えよや。ささめごとなれども。今洩れそむる。涙かな。され共。世の中の。され共世の中の。流転生死のならいとて。その身は馬嵬にとどまり。魂は。仙宮に至りつつ。比翼も友を恋い。ひとりつばさをかたしき。連理も枝くちて。忽ち色を変ずとも。同じ心のゆくえならば。ついの逢せをたのむぞと語り。給えや。

ワキ「さらばと書いて。いで船の。ともない申し帰るさと。思わば嬉しさの。なおいかならんその心。

シテ「われはまたなになかなかに三重の帯。めぐり逢わんも知らぬ身に。よしさらばしばし待て。ありし夜遊をなすべし。

地謡「げにや驪山の宮のうち。月の夜遊の羽衣の曲。

シテ「そのかざしにて舞いしとて。

地謡「またとりかざし。

シテ「さす袖の。

地謡「そよや霓裳羽衣の曲。そよや霓裳羽衣の曲。そぞろにぬるる袂かな。(地取り)

<物着>

シテ「なにごとも。夢まぼろしのたわむれや。

地謡「あわれ胡蝶の。舞ならん。

<イロエ>

※地謡「それ過去遠々の昔を思えば。いつを受生の始と知らず。未来永々の流転さらに生死の果てもなし。

シテ「しかるに二十五有のうち。いずれか生者必滅の理りにもれん。

地謡「まず天上の五衰より。須弥の四州のさまさまに。北州の千年。ついにつきぬ。

シテ「いわんや老少不定の境。

地謡「歎きのなかの。歎きとかや。

地謡「われもそのかみは。上界の諸仙たるが。往昔の因ありて。かりに人界に生れきて。楊家の深窓にやしなわれ。いまだ知る人なかりしに。君きこしめされつつ。急ぎめしいだし。后宫に定めおき給い。偕老同穴の語らいも。縁つきぬればいたずらに。またこの島にただひとり。帰り来りてすむ水の。あわれはかなき身の露の。たまさかにあい見たり。しずかに語れ憂き昔。

シテ「きるにても。思い出づれば恨みある。

地謡「その文月の七日の夜。君とかわせし睦言の。比翼連理の言の葉も。かれがれになる私語の。笹の一よの契りだに。なごりを思う習いなるに。ましてや年月。なれてほどふる世の中に。さらぬ別れのなかりせば。千代も人にはそいてまし。よしそれとてものがれえぬ。会者定離ぞと聞く時は。逢うこそ別れ。なりけれ。羽衣の曲。

<序ノ舞>

シテ「羽衣の曲。まれにぞ返す。乙女子が。

地謡「そでうちふれる。心しるしや。心しるしや。

シテ「恋しき昔の。物語り。

地謡「こいしき昔の。物語り。つくさば月日も。移り舞の。しるしのかんざし。

また賜りて。いとま申して。さらばとて。ちよく使は都に。帰りければ。

シテ「さるにてもさるにても。

地謡「君にはこの世。あい見んことも。よもぎが島つ鳥。うき世なれども。恋しや昔。はかなや別れの。とこよの台に。ふし沈みてぞ。とどまりける。

初雪（はつゆき）

【分類】三番目物（鬘物＝精天仙物） *中ノ舞

【作者】金春禅鳳

【主人公】前シテ：姫君（面・小面）、後シテ：鶏の霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

ある姫君が白い鶏を飼っていましたが、雪のように白いので「初雪」と名づけ、かわいがっていましたが、ある日死んでしまいました。姫君はひどく悲しみ、近所の上臈を集めて、供養をしました。すると、その初雪が空に現れ、弔いによって、極楽に行くことができ、楽しみつきない身になることができたと、しばらく懐かしそうに飛び回っていましたが、やがてどこかへ飛んで行ってしまいました。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

この念仏の功力にひかれ。この念仏の功力にひかれて。たちまち極楽の台にいたり。八功德池の汀に遊び。鳧雁鴛鴦につばさをならべ。七重宝樹の梢にかけり。楽しみさらに。つきせぬ身なりというつけ鳥の。羽風をたてて。しばしがほどは飛びめぐり。暫しがほどは飛びめぐりて。ゆくえも知らず。なりにけり。

能のミニ知識

★能の分類

五番立て…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のを効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといえます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

★能の楽器

囃子方〔はやかた〕…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

笛(能管): 竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

小鼓: 左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

大鼓: 左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

太鼓: 台に据えて、二本のバチで打ちます。

★略式の演能

素謡〔すうたい〕

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡います。江戸時代に入って一般に普及した上演形態です。

独吟〔どくぎん〕

謡の「聞かせどころ」を独演するものです。演者は紋付袴姿です。

連吟〔れんぎん〕

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するものです。演者は紋付袴姿です。

仕舞〔しまい〕

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞うものです(通常5分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡だけをバックにして舞います。仕舞扇を用いますが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いません。シテ一人で演じるのが普通ですが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものなどもあります。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされています。

舞囃子〔まいばやし〕

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子をバックにして装束や面をつけずに舞うもののことです。平均して10~20分程度の長さになり、長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略します。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となりましたが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされています。

★部分の名称

段物〔だんもの〕

能の一曲中の聞かせ所・見せ所とされる部分で、クセやクルイなどの類型的形式に属さないものものを『〇〇の段』と呼んでいます。構造も特殊で、内容も濃く、型も派手なものが多いので、独吟や仕舞、一調を演奏する部分となっています。

「葵上」の『枕の段』、「海人」の『玉の段』、「小督」の『駒の段』などが有名です。

★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも速く、颯爽と舞う舞です。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に速くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。
雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。
中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。
「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。
精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。
「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページ
(<http://www.syuneikai.net>) にも掲載しています。